宵の空に銀色の軌跡

櫻井秋月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
宵の空に銀色の軌跡

【Ｎコード】
Ｎ５８７１Ｙ

【作者名】
櫻井秋月

【あらすじ】
第二次世界大戦の折、襲来した「帝国」によって世界は破滅の危機に追いやられる。　結果として世界は団結を余儀なくされ、戦争は世界対帝国という形で行われた。　これが、この世界の第二次世界大戦である。　戦後６０年経った現代。またその戦火が呼び戻されようとしていた。

機神

日本国所属国連軍対「帝国」用変形型機動兵器。通称“すさのお”。
無骨なそのフォルムは見るだに重装甲で、艶消しをされた黒色のカラーリングがまたその重々しさを強調しているかのようにも見えた。

嘗ての「帝国」との戦いによって人々はその人口の半分を消滅させることになった。
世界の約２０％は人が住めない汚染区域となり、今でもその汚染の除去作業が行われているが、戦後６０年経った今でもその回復率は半分程度である。
しかし、「帝国」によってもたらされた技術は確かに世界に大きな躍進を生むことになったのは言い逃れの出来ない事実である。
嘗て、６０年前の世界の技術力は、「帝国」の足元にも及ばなかった。実際その当時に使われていた火器類は帝国にとっては只の豆鉄砲にしか過ぎず、その火器類が「帝国」の機動兵器に傷をつけることは結局無かった。
それまでに技術力の差があったのだ。
絶望的な状況下で、「帝国」による虐殺も止められなくなっていたその時、世界が滅びようとしたときに現れた救世主が居た。
「それ」はどこからともなく現れ、帝国の１部隊を全て薙いでしまった。
また、帝国の中でも反乱が起き、そうして逃げてきた帝国の者と共に人類は対帝国用兵器を開発。また、「それ」によって鹵獲された「帝国」の機体を研究し、遂には帝国の機動兵器を撃滅できるような兵器を創りだした。
こうした人類の努力と、救世主のお陰で、「帝国」はその主力部隊

を失い、撤退した。
この“すさのお”もその技術が創りだした英知の結晶である。
進化した第５次圧縮型核エネルギーコアをジェネレーターに持ち、一度に約１２００時間の連続起動（エネルギー抑制モードで連続使用時）に耐え、人型形態と戦闘機形態への変形ができる。戦闘機形態の時は飛行が可能で、その飛行ユニットは人型形態の時には背中に背負っており、それによって一時的な空中への大幅なジャンプを可能にしていた。人型形態の時はその両腕に火器を持ちながら、地形を選ばない二つの足。最新のマニピュレーターによる四肢制御により、局地でも安定した運営が可能になっている。
無骨ながらもその指先は器用で、現在では災害援助などにも駆り出されている機体である。また、機体全体にエネルギーフィールドを展開可能で、戦闘使用では稼働時間が５０時間に限られるものの、その力たるや強力で、機体には例えば広島型の原子爆弾を命中させられたとしてもゆうに耐えられるという計算まで出ている。
故に、国連には各国のすさのお型機動兵器の保有を制限する憲章もある。

その“すさのお”は夜空遠く、星を見上げるような感じで哨戒を行っていた。
今いる場所は日本国所属国連軍千葉支部対驚異観測所。その観測所の高台に“すさのお”は仁王立ちになっていた。
約３０００キロ先をも見通せるそのズームレンズを搭載した赤い双眸が光っていた。

「ん？」

“すさのお”のパイロットである安藤は少し怪訝な顔を見せた。
心なしか、夜空が光ったように見えたからだ。しかしズームレンズ

はその変化の元を見ることは出来なかった。
疲れているからだろうか。安藤はそう思っていた。このコクピットに座って、もう8時間にもなる。そういえば眠気も最高潮に達していた頃だった。

「気のせいか」

眠気覚ましのタブレットのボタンを押し、出てきた細い針を血管へと入れる。
瞬間、今までのだるかった眠気が嘘のように引いていく。

「しかし…夜間の哨戒任務は毎度ながら体に応えるなぁ」

副作用によって低下していく体温を少しでも低下させないように体を抱く。
そして体はブルブルと低下に反応して体温を創りだす反射を行っていた。

「後もう少し…」

彼の任務はもう少しで、解かれることだろう。そうすれば寝たい放題だ…。

「休暇、何すっかなぁ」

コクピットに飾られた恋人の写真で、浮めく安藤の心象が見て取れるようだった。
その恋人の写真の隣にはアロハシャツを着てニヤニヤする安藤の姿があった。

「やっぱ石垣島かなぁ」

その写真を見て、ニヤニヤしながらも真面目にやらねばと安藤は哨戒任務へとすぐに戻った。

―

幼い頃、祖母が大戦の話をしてくれた。
彼女はその時「機神様」を少しだけだが見たと言う。
銀色の光り輝くメタリックボディ。洗練された人型のロボット。
それが通った後には青白い光が尾を引いていたと言う。
それはまるで空を駆ける彗星。
彼女はその姿に目を奪われたと言う。

僕も…一度で良いからその機神様に会ってみたいと、幼いながらに思っていた。

目覚まし時計のけたたましい音に起こされる。そんな音にうるさないなと思いながらも微睡んでいると、また別なる目覚まし時計が鳴り始める。
うーうーと唸りながらまだ起きまいとすると今度は複数の目覚まし時計が大合唱を始める。…やっぱり、流石にコレは起きるな。
僕、こと宮藤晶平は非常に朝が弱い。殺人的なほどに弱い。
目覚めた後の動きは非常にスムーズなるも、その前の動き、目覚めるまでにものすごい時間がかかる。
お陰さまで朝は毎日目覚まし時計を複数、しかも少し時間をずらしてセットしなくてはならない。まぁ、こうしたお陰で遅刻することはなくなったのだけれど。

微睡んでいる間…夢を思い返していた。

今は亡き祖母がみたというこの世の救世主「機神様」。それは確かに今配備されている“すさのお”なんかより何倍もスタイリッシュで、カッコ良いだけではなく、何倍も強かったらしい。
確かに正史を紐解いてもその救世主の名前はどこでも上がっている。人類の反撃の狼煙を上げた世界の救世主。どこからともなく現れ、そして去った銀色の彗星。
ベッドから飛び起きた僕は机にあるつくりかけの１／１４４“すさのお”のプラモを箱に仕舞い、棚にしまった。
因みに、その救世主の姿を見たものは居ても、その写真は全く残っていない。
つまり、戦争を体験していない僕らがその姿を見ることは出来ないのだ。
だから、想像するしか無い。
でもどーしても“すさのお”みたいになってしまう。

「すさのお…カッコ良いと思うんだけどなぁ」

僕はつぶやきながら登校の準備をした。

―

登校した僕を待っていたのは友人たちのせわしない雑談の相手だった。

「そういえば、晶平はあのプラモもう作っちまったのかよ？」
「んー、あとは色塗って…ちょこちょこ色々やらなきゃだから出来るのは明日ぐらいかなぁ」
「やっぱ“すさのお”はかっけぇよなぁ。世界初の次世代型機動兵器。無骨ながらもスラスターで高速移動可能。重さを感じさせないなめらかな挙動に戦闘機形態では音速を超える移動が可能だってん

だからなぁ…そりゃもう男のロマンも溢れまくってるよな」
「まぁねー。やっぱすごいよ国連は。頑張ってるよね」
「いやーほんとロマンあふれるわぁ…」

僕は友人とそんな話をしながら、窓辺で机に座って本を読む委員長の姿を見ていた。
彼女は物静かな人間だった。ずっと常に本を呼んでいるような人間。長いさらさらの黒髪は流していて、その顔には赤い縁のメガネ。顔は少し幼めで美人な方だと僕は思っている。そんな物静かな彼女が僕は気になって気になって仕方がなかった。

「何読んでるのさ？」
「…局地的使用条件における第４次圧縮型核エネルギーの有効性とそれによってもたらされるであろう驚異」
「…頭が痛くなった」
「…そう」

顔色一つ変えずに、こちらを見ずに、大した抑揚もつけず本に目をやったまま僕に答える委員長。
「あのさ」
「何？」
「この間さ、面白い漫画買ったんだよ。結構面白かったから委員長もどうかと思ってさ。あー…あんまり漫画読まない？」
「…いえ、読むわ」
「じゃあ、貸そうか」
「ええ、お願い」

それから何かを話そうと思ったけど、読書の邪魔をしているようでバツが悪かったので退散した。よし、コレで明日も話す口実が出来た。

「なんだよ、また委員長のところ行ったのかよ?希望も持てないのによくやるよ」
「別にふられたわけでもないから良いだろ」
「あの鉄面皮が恋愛とかするわけ無いだろ…アタックするだけ無駄だって無駄無駄」
「いいんだよ別に恋愛できなくても…僕が勝手に片思いしてるだけでも僕は幸せなのさ」
「なんていうか…もの好きだなぁお前も」

そんな友人の言葉を聞き流しつつ、今日の授業の準備を始めた。
今日も一日平和に過ごせそうな、そんな予感がしていた。

「さて、今日も一日頑張ったなっと…」

学校も終わり下校時刻になった。クラブ活動を行っていない僕は他の人間より一足先に帰ることになった。
さて下校しようと思っていると、校門へ向かう影一つ。委員長だ。
この機を逃す手はないと、彼女を呼び止める。
彼女が僕へ振り向いたと同時に…。

何かが校門の外の比較的近い場所へと落ちてきた。それは重い音を立て、そして周囲の地面を振動させた。
僕はその方向を見る。
委員長がいる場所のもっと向こう、校門の先…そこにあったのは…。
間違いない。今日だってその作りかけのプラモの部品を見てきたのだ。間違えるはずもない。あれは…。
「“すさのお”の頭部!?」

―

日本国軍千葉支部対驚異観測所。その高台で仁王立ちになっている“すさのお”。その中のパイロット、安藤にもそろそろ交代の時間が訪れる。

時刻は午前7時。もう少しもう少しと眠気覚ましを投与してもう2時間も過ぎる。

夜間の哨戒任務は１０時間だ。空調が整っているとはいえ、機体の中は閉所で何の娯楽があるわけでもない。単調で退屈かつシビアな任務である。

ふぅ、とため息を突きながら、朝日を見遣る。

太平洋の広い海に朝日が綺麗に映っていた。すがすがしい朝だ。

しかも安藤はこの任務が終了すれば休暇だ。なんと素晴らしい朝なのだろうか。

「ん…？」

“すさのお”は海の向こうの異変をその超長距離ズームレンズで捉えた。

太平洋沖３００ｋｍ地点。国連の偵察巡視艇が回る区域だ。そこで水柱が見えた気がした。

「“すさのお”より観測所。太平洋沖北北東３００ｋｍ地点で水柱を確認。かなり大きいものだったが、何か連絡はないか？」

「連絡も何もその地点に居た偵察巡視艇から連絡が途絶えた。何かあったのかもしれない。“すさのお”はすぐにそちらに向かってくれ」

「了解、“すさのお”戦闘機動。戦闘機型で音速移動する」

「燃料は満タンだ、いつでもいける」

「では、出る！」

アイドリングから一気に戦闘駆動へ切り替わり、けたたましい音を立てながらスラスターが熱波を吹く。人型で任務に当たっていた“すさのお”だが、今は既に戦闘機形態へと変化していた。そして高台を浮上。空を裂き、目的の地点へと向かった。

―

“すさのお”の顔…何故こんな所に飛んできたのか？
その顔の部分は無理やり引きはがされたかのような状態だった。顔の至る所に引っ掻き傷なのかなんなのか分からない傷が付いている。

その顔が落下した地点はひどい有様だ。住宅街だったこともあって色々な家屋の窓ガラスが割れ、落下地点に至ってはもはや瓦礫の山だった。

警報。

けたたましく鳴り響くその音に僕は驚いた。
それは、避難訓練でしか聞いたことのない音だった。
何が起きているんだ…？
僕はなんの気なしに空を見上げた。そこに映る光景は地獄の様相だった。
タコのような謎の巨大兵器に絡め取られる無残な姿になった“すさのお”２機。一つには顔はおろか両腕が付いていなかった。
戦闘機が周りを回ってその巨大兵器に攻撃を仕掛けているが、僕でも視認できる謎の紫色の壁でその攻撃が弾かれている。
エネルギーフィールド？でも…エネルギーフィールドなら対ＥＦ用弾丸が効く筈だ。

こうしては居られない。早く最寄のシェルターに避難しなくては。
学校も既にパニックになっている。シェルターへと移動する生徒や先生が僕をすり抜けていく。早くシェルターに行けと怒鳴り立てる声がする。そうか…行かないと。
走りだそうとする僕、しかし目の前の委員長は校門のところから動こうとしなかった。
ただ空を見上げ…無表情なまま、巨大兵器と国連軍の戦いを見ていた

「なにしてんのさ！早くシェルター行かないと！」

動かない委員長の右手を取る。そしてそのまま引っ張ると、彼女もそれに応じて僕の右手を握り返し、一緒に走ってくれる。
緊急とはいえ…手を繋いでしまった。ドキドキしながら僕はシェルターへと彼女を連れて走っていく。
「…駄目だわ。このままじゃ…アレは止まらない」

走りを止めて空を見上げ、彼女は抑揚少なげに言った。
僕も突然止まった彼女に合わせてその走りを止めていた。

「でも、僕らじゃどうにもならないよ。僕らは早くシェルターに行かなきゃ。さぁ、行こう」
「いいえ…大丈夫よ。私“達”なら…」

どういうことだ？そう思いながらも、もう一度彼女の手を引こうと手を握ったその時。
僕の意識は途絶えてしまった。

―

「なんじゃあこりゃあ…」

安藤はその光景に驚いていた。そこには巡視艇の残骸が無残にも海の藻屑となっていたのだ。
どうしてこうなってしまったのか。安藤の疑問はすぐに解決されることになる。
ピピッ
レーダーが敵性の攻撃反応を感知。回避？いや無理だ。
エネルギーフィールドを展開！
ヴヴヴと低い音を立てながらジェネレーターが対攻撃用エネルギーフィールドを機体全体に纏わせる。すべての衝撃から身を守るシールドである。
同時に謎の攻撃が“すさのお”の機体を揺らす。そして大きくはじき飛ばした。
ものすごい衝撃だ。間違いなくエネルギーフィールドを展開していなければ巡視艇と同じ末路をたどっていたかもしれない。回避しようなど思わなくて正解だった。そう安藤は感じた。
“すさのお”によって曲げられたその攻撃は海の方へと向けられ、太平洋の海が大きく水柱を上げた。これだけでも恐ろしい破壊力だとわかる。
水柱の水を浴びながら、“すさのお”は体制を立て直した。そして攻撃された方向を見る。そこにはタコのような形をした巨大な…実に巨大な兵器のようなものが宙を舞い、緩やかに移動していた。
「本部、正体不明の巨大兵器と現在交戦中。応援を頼む」
「了解・すぐに向かわせる。こちらの“すさのお”も出す。いけそうか？」
「わからない…以前資料を読ませてもらった「帝国」の兵器とも違うみたいだ。正体不明」
「可能なら撃破…そうでなければ応援が着くまで足止めをしてくれ。もしその巨大兵器が日本への攻撃が目的なら…上陸は全力で阻止せ

ねばならん」
「了解」
通信が切れたあとで安藤は溜息をつく。
「とはいえなぁ…これは…」
タコのような巨大兵器は矢継ぎ早に“すさのお”へと光弾を投げつけてくる。その破壊力1発1発がエネルギーフィールド無しならば耐え切れない破壊力だ。
「足止めも難しいんじゃないか？」
“すさのお”は戦闘機形態から人型形態に変化し、対ＥＦ徹甲弾搭載型ライフルを両手に持った。
休暇前にでかい仕事になってしまったな、と安藤はまた幾度目かの溜息を吐いた。

―

「起きて」
その言葉に僕は目を覚ます。するとそこはコクピットのような場所だった。
様々な計器が並んでいるが、何のことだかさっぱりわからない。そしてモニターが３６０度全てに展開していて、このコクピットが空の上にあることが何となくわかる。
足元を見れば小さくなっている街が見えた。
その光景を見て僕は驚いた。何故僕はこんな所にいるのだろうか？
妙に座り心地のいいパイロットシートに腰掛けた状態で僕は寝てい

たらしい。
たしか…僕は委員長と一緒にシェルターに行く途中だったはずだ。
「起きたのね…やっぱり貴方がリンカーだった」
「委員長？何処に居るのさ？あと、此処は何処？僕は何でここに居るの？」
「ここは私の“ナカ”…貴方は今私の中にいるの」
「は？意味分かんないよ…委員長の中…？」
「詳しい説明はあとでするから。アレを倒さなきゃ」

アレと言った瞬間、ピピッとレーダーが動き、目標をポイントする。
赤いマーカーで示されたその先にいたのは先程のタコのような兵器だった。その兵器はゆっくりと移動し、邪魔をする国連軍の戦闘機を破壊しながら移動していた。
バチバチと言いながら触手のようなものに絡め取られた“すさのお”が光る。どうやら“すさのお”の第５次圧縮型核エネルギーコアを利用してエネルギー補給をしているようだ。不気味な兵器だった…。目的も謎なのにその動きも謎過ぎる。
しかし、正直なところ、現在の国連の戦力ではあのタコには勝てないだろう。何故なら国連の最強戦力は“すさのお”級機動兵器であり、日本は機動兵器の先進国と呼ばれるほど最新式の機動兵器を有しているからだ。その日本の“すさのお”が勝てなければ…どうしようもない。
「倒すったって…どうやるんだよ…。“すさのお”もやられてるんだよ？勝てっこないよ」
「大丈夫…信じて…」

信じて、の声になんだか安心させられてしまった。
何に乗って空を飛んでいるのか分からないが、何かしら委員長にも

考えがあるのだろう。

「でもさ…僕、今何に乗ってるの？」

その言葉に反応するようにモニターがポップアップして客観視モードでのこのコクピットを有する乗り物の全景を映しだした。
それは綺麗な銀色の…綺麗なフォルムをした人型のロボットだった。

「機神…様…？」
「今はただ勝利だけを願って…。コントロールはしなくて良い。ただ願っていて」

僕の驚きには何の反応も見せずに…委員長のその声は僕にそう言い放つ。

「勝つ…」

僕はそのコクピットでこの機体の勝利を願った。
きっと…勝てる…と。

―

「ハッ」

目を覚ますとそこは暗い場所だった。少し頭痛もする。
うーと唸りながら身を包んでいたほのかに桜の香りのする布団から抜け出す。
此処は何処だろう？
暗さに慣れてきた目で辺りを窺う。そこには掛け軸や生花が飾られ

てあった。
どこかの和室？僕は未だに理解できずに、僅かな光を放つ障子を開ける。
踏み出すと木の床が軋む音がする。目の前には大きな窓、そしてその向こうにはよく手入れされた日本庭園が広がっていた。
その日本庭園の向こう、砂利の敷かれた場所。そこにある石で作られた腰掛に座っていたのは僕のよく知る委員長だった。
相変わらず委員長は制服姿で、日本庭園でその姿を見るとなんだか浮いていたけど、月明かりに照らされた委員長はとても綺麗で、惚れていた僕はまた惚れ直してしまう。
彼女は僕が居る窓を見ないで、ただ池に泳ぐ鯉を見ていた。

ふと流れた旋律があった。
それは彼女が口にした旋律。未だ彼女は鯉を見ている。そして歌っていた。
その旋律は懐かしかった。どこかで聴いた気がするけど、初めて聴く気もする。そんな旋律。
思い出そうとすると起きがけの頭痛がまた痛みを訴えてきた

「起きたのね」

背後からいきなり話しかけられて僕は驚いた。
委員長？と思ったけどそうじゃなかった。声があまりにも似ていたのでビックリした。
声の主はとても綺麗な女性だった。年の頃は２０代後半から３０代前半に見える。着物を着こなしていて、この大きな日本家屋の雰囲気に合った人だった。顔も似ているから委員長の兄妹か何かなのだろうか？

「此処は私達の家よ。あの子…佐々木葵綾（ささきあやあ）の家でもあるわ」

「でも、僕は何故此処に？」

何故僕はここにいるのだろうか？僕は起きるより前の記憶が曖昧だった。

起きて学校に行って授業に行って…それから…それから…？

「貴方はこの世界を守ったのよ。葵綾と一緒に」

「守った…」

守った…。

僕が世界を守った？委員長と一緒に…？

今はただ勝利を願っていて。

そうだ、僕は機神様に乗って…乗って…？

乗ったのか僕は…そうか、乗ったんだ…そして…。

「勝ったんですね…」

「ええ。だから貴方は此処に居る」

記憶が曖昧でうーうー唸る僕にその女性は優しく微笑んだ。

「最初のリンクだものね、疲れているのよ。今日はもう此処で泊まっていきなさい。親御さんにはもう連絡しているから」

「ありがとう御座います」

そう言えば…。

あの旋律を聴いてから僕はもうなんだか凄く眠くなっていた。

「あら、おねむなのね。お布団敷き直すから、少し待っててね」

「はい、ありがとうございま…」

「す」の音を出す前に、僕はその場で意識を無くしていた。

―

敵性存在を認めたそのタコのような兵器は“すさのお”2機を絡めとったまま他の触手を使ってその先から銀色の機体に向かって光弾を放つ。その光弾に反応して銀色の機体はその輝きを増す。そしていつの間にかその手には二丁の拳銃のようなものが握られていた。その拳銃は光弾を放ち、タコのような兵器の光弾を撃ち落とす。その後、その二丁の拳銃は続けざまに光弾を放った。タコのような兵器は紫色のシールドを展開し、その攻撃から身を守った。反撃でタコのような兵器も光弾を出すが、量が違いすぎる。すぐに相殺され無数の光弾がそのシールドへと降り注いだ。

間もなくしてシールドがビキビキとヒビ割れ始める。マズイと思ったのかタコのような兵器はブゥンと大きな音を立ててその場から消える。するといつの間にか銀色の機体の目の前に現れた。瞬間移動というやつだ。

一瞬隙が出来たその銀色の機体にタコのような兵器はその大きな触手を無数に伸ばし攻撃しようとする、八方から襲いかかるその攻撃に為す術もないと思った銀色の機体。

しかし終わりは来なかった。二丁の拳銃は扱いやすい刀身の2振りの小太刀のようなものに変形し、触手を切り刻む。踊るように舞うように、その銀色の機体は夕焼けの残る宵の空に銀色の軌跡を残しながら触手を切り刻んで行った。

為す術もないタコのような兵器。“すさのお”も手放しており、光弾を放つ触手もほぼ切り刻まれてしまった。

瞬間、モニターは光りに包まれてしまった。

「ここまでか」
「せや。この後自爆したんやろけど、その形跡は現場には残ってへんかった。おっそろしいもんやで救世主様は」
「この兵器…何だと思う？」
「ワイが思うにおそらく「帝国」の新兵器なんやなかろか？フォルムは以前と全然似てへんけどエネルギーフィールドっぽいもんに転移空間ジェネレーターの使用なんか「帝国」の十八番中の十八番やったもんや」
「やはり…「帝国」か…」
「ま、この救世主様に訊くのが一番やよって」
「補足できたのか？」
「まー、ワイに掛かればちょろいもんやで。ナギサ向かわせたわ」
「そうか…」

暗い部屋でモニターを見る黒い服の男が二人。
砂嵐の流れるそのモニターを未だにじっと見ていた。

螺旋

「人は心の空白を埋めるために他人と接触するらしい」

青年はそう言った。音は広い空間を流れていった。
黒で塗りつぶされた空間に白いベッドと白いシーツ。
そのベッドの中に居る二人。一人は青い髪と青い瞳の細身の青年。
もう一人は黒いおかっぱの髪と茶色の目の未だあどけなさの残る病的に肌の白い少女。
二人は衣類を纏わず、裸のままで白いベッドに横たわっていた。青年の右手が少女の左手を握っていた。

「そもそも男と女は元々一つの存在だった。故に男は女を、女は男を求めるのだという。半身を求めるのは過去の自分を求めているからなんだろうかね」

見れば、少女の首には首輪が嵌められており、両腕にも鉄製の環が見える。足にも同様にその鉄製の環が嵌められている。
少女は青年の方を向きながら笑顔で尋ねる。

「そういう話、好きなんですか？」
「ああ、そうなんだ。僕は意味もないことを考えるのが凄く好きでね」
「私もそういう話好きです。ロマンがあって」
「ロマンか…僕は悲しくも感じるけどね。一つだったなら別々にする必要なんてなかったのにねって」
「そうですか？」
「そうだよ…ほら、恋愛っていうのは上手く行かないからさ。一つだったならそんな悩みも無くなるはずなのに」

青年は首輪を見ながら微笑む。彼女はそれを見て笑う。

「そうかもしれませんね」

そう語らう二人の空間に電子音が響く。すぐにベッドの上のモニターが展開され、兎のぬいぐるみのようなものがその画面に映し出された。

「何だい？」

「帝国議会の方々が会議場へ集合なさっています。議会への出席を皇帝に求めていますが、如何なさいますか？」

「やれやれ…老人会は五月蝿いな…。ああ、わかった。すぐに出向くから待っていろと言っておいてくれ」

「かしこまりました」

モニターが消える。やれやれといった顔をしながら青年はベッドから外へ出ようとする

。が、少し思い返して少女の方を向く。そしてキスをして笑いかける。

瞬間、部屋が揺れる。それはこの世界ではもう日常的な揺れだった。

地震…それは大地の破滅を告げる音でもあった。

「終りが近い…世界の終わり…でも僕はそれを綺麗だと思うんだ。老人会はそんな情緒を感じられないのかな。少し悲しいよ」

「人は、生を求めるものらしいですから」

「そうだね…生きていればもっと素晴らしいことに出会えるかもしれないしね。じゃあ、行ってくるよ。いい子にしておいて」

「はい。行ってらっしゃい」

彼がベッドから降りると黒の空間から賛美歌を歌う女性型アンドロイドが何処からともなく現れる。そして、人の大きさほどの兎の着ぐるみのようなモノがドアを開き４体ほど現れ、彼に衣服を纏わせる。
青い髪で蒼い瞳の青年は現在の「帝国」の「皇帝」である。
黒を基調とした荘厳な感じのデザインの皇帝の服に着替えると、彼はその部屋を後にした。

「世界の終焉か…僕も綺麗だと思いながら生を願う一人なんだろうね。未だ僕はこの宇宙に輝く綺羅星になりたくないと思っているんだから。…こんなに綺麗なのにどうしてだろうね」

独り言を呟きながら彼は黒い部屋とは対照的な真っ白い廊下を兎の着ぐるみのようなものと歩いていった。

―

廊下を歩く高校の女子生徒の格好をした人物が一人居た。歩くその廊下は決して真っ白で無機質なものではなく、何処にでもある学校のリノリウムの廊下。
共に歩くのは決して謎の兎の着ぐるみのようなものではなく、これから担任の先生となる女教師だった。
二人は教室のドアを開き、クラスのＨＲの時間に現れた。
高校の女子生徒の格好をした人物は女教師に紹介される。
その紹介をそのクラスの人間たちは静かに聞いていた。否、静かではない。そこかしこで転校生の出現にヒソヒソと話している。

「浅井凪咲です。よろしくお願いします」

浅井凪咲は黒いセミロングの髪で身長は１６０センチ前後の少し背の高くすらっとした出で立ちだった。
そんな凪咲は大人びた囁くような声でクラスの皆に挨拶した。
クラスの皆は拍手で凪咲を迎える。そこかしこから美人だとヒソヒソと囁く声がする。

「あー、彼の席は…」
「センセー！女の子だったら彼女って言ったほうが良いと思いまーす」

どこからかそんな声がした。

「あー…それがだなぁ…」

女教師は困っているとそれに呼応して凪咲は女教師に笑いかけ、クラスの皆の方に向き直る。

「あの、こんな格好してますけど…僕、男です」

その瞬間、クラスの時間が止まった。
そしてざわめきが起こった。それは誰からともなくクラスの人間の殆どに感染した。

「まぁ…そういう訳だ。制服着用は義務付けられてても、男は男子用の制服を着てこいとは書かれていないからな…私も最初は戸惑ったが…まぁ、外見的に問題ないので会議も開かれた結果ＯＫとなった。あー、席だったな。おい、佐々木」
「はい」

女教師に呼ばれた佐々木葵綾は読んでいた本をパタンと閉じて反応

する。

「お前の隣、開いてるだろ？その席が凪咲の席になる。色々とよろしく頼むぞ委員長」

「はい…」

その言葉に言葉少なく反応する。

隣りに座った凪咲を見て、よろしくと言うと葵綾は本にまた向き合う。

そんな葵綾を見ながら凪咲は笑顔で葵綾に話しかける。

「よろしくね、葵綾さん。これから色々とお世話になると思うけど」

「ええ…出来ることはやるわ。よろしく」

凪咲は教壇に向き直ると小声で呟く。

「本当に…色々と…ね」

―

帝国議会。皇帝制を敷いているこの世界だが、実のところは帝国議会が様々な政治の実権を握っている。皇帝による承認などを受けなくては様々な事項が可決されない仕組みだが、現在の皇帝はその拒否権は無いに等しく、基本的にはどの法案も帝国議会で議論された後に実質そのまま通ることになる。いわば皇帝はお飾りでしか無い。

そのなかでもとりわけ「賢人会」と呼ばれる老人たちは帝国議会の中でも発言力が高い。

賢人会は各国の有力者であり、１０人居るが、その１人１人が絶大

な権力を持っている。
いわば、この帝国議会は賢人会によって実質動かされていると言っても過言ではない。

「皇帝陛下、入ります」

円卓の中心の床が開き、豪奢な椅子に座った細身の青年がそこから上がってきた。その表情は非常に不機嫌そうだ。肘掛けに肘を付き、頬杖をついている。
円卓のまわりを囲んでいるのは賢人会。それ以外の議員はその周りに座っている。
ざわざわとしていた議会だが、皇帝の登場によりすぐに静まり返る。

「皇帝陛下。お久しく御座いますな」
「そうだね…出来れば顔も見たくはなかったんだけどさ」
「お戯れを…」

すぐに議会は法案の審議に入る。様々な審議が行われ、そして議題は地球への侵攻へと移された。

「先の地球侵攻攻撃プログラムの開始ですが。やはりオクトパスがあの銀色の機体によって落とされたようです」
「オクトパス…アレの開発には莫大な予算が使われているのだぞ？それがいとも容易くか？」
「戦闘データを見るかぎりは。地球に存在していた現在人類最強と思わしき機体には勝利しましたが、やはりあの機体は強い…」

ざわざわと議会がざわめきだす。それだけあのオクトパスと呼ばれた兵器には信頼を置いていたのだろう。それを落とされた今、議会

は今後どうするべきなのかと騒いでいたのだ。

それを見て皇帝がパチンと指を鳴らす。

「僕らが知りたいのはこれからだよ。ねぇ？プロフェッサー・ミハイル」

「ククク…ワシの傑作がアレだけと思うなよ？もうオクトパスを超える機体は用意しているのじゃ…。おまえさん方の運用次第では化けるともうがね？」

ミハイルは白衣を着た老齢の男だ。丸い縁無しメガネを掛け、不気味な笑い方をする男だった。その男の発言にまた議会は沸く。

「あの銀色の機体を避けて別の箇所から攻撃を行う。そうすればある程度地球にはダメージを与えられるだろう。やはり日本は最後に攻撃で間違いないようだ」

「ではそのように…皇帝、良いですな？」

「ああ。何にせよ僕に拒否権はない。好きにしなよ」

尚も頬杖をついて皇帝は呟く。

「…君らでは地球侵攻は無理だよ」

―

あの日、あの謎の巨大兵器の襲来を受けてからもう3日になる。

僕はあの日、そのまま倒れるように寝てから丸一日寝ていたらしい。

起きてから、僕を心配する家族のもとに帰ったのは昨日の昼頃だった。

結局あれやこれやといううちにその日も過ぎ、今日からやっと通常業務だ。
昔は学校なんて行きたくないと言っていたもんだけど、学校へ行けるのは幸せなことなんじゃないかと最近思い始めた。
すさのおの顔が落ちた場所は今も工事中だった。避難命令が出ていたお陰で人死はなかったようだけど、家がなくなるというのは辛いだろうなぁと思いながら校門をくぐった。

「宮藤晶平君…ですよね？」

下駄箱で、僕の声を呼ぶ女性の声で僕は振り返る。そこに居たのは僕の学校の制服を着たきれいな少女だった。何学年だろうか？と、いうより僕はこんな知り合い居ただろうか？

「え？あ、そうだけど…？」
「私、ナギサって言います。浅井凪咲」
「うん、凪咲さんね。何か用かな？」
「あの、お願いがあるんです…お昼休みに、屋上まで来てもらえませんか？」
「え？あ…え？…う、うん…良いけど」

まさか、僕は告白をされてしまうのではないのだろうか。少しドキドキしてきた。
いや、ドキドキしても僕には委員長という心に決めた人がいるのだ。その人の家で寝泊りまでしたのだ。浮気はいけないな浮気は。でも、この子可愛いな。

「よかったぁ～。では待ってますね。あ、佐々木葵綾さんも一緒にどうぞって言って下さい」

「え？委員長も？」
「はい、待ってますね」

ウインクをして下駄箱から去る少女。
…委員長と一緒？どういう事なのだろうか？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5871y/

宵の空に銀色の軌跡

2011年12月7日04時06分発行